

田中 優子 (法政大教授・江戸学)

小熊英二の『1968』は村上春樹の『1Q84』とたまに間違われたりしたが、歴史絵巻的ノンフィクションの面白さを

存分に味わえる本で、記憶の倉庫から様々なものを引き出してくれた。四〇年の彼方から今の自分をみつめる書であった。

渡辺保の『江戸演劇史』はさすがの筆致である。歌舞伎のみならず、能、狂言、音曲、舞踊、遊郭の交叉と、相互に刺激し合いながら盛り上がってゆくそのダイナミズムを、映画のように鮮明な活気で見せてくれた。

映画といえば篠田正浩の『河原者ノススメ』は、映画監督が日本文化の深層に迫ってゆく希有な書で、しかも『江戸演劇史』の裏の演劇史である。今の俳優には河原者意識は皆無だろうが、その河原者という存在の力と深みが迫ってくる。日本演劇の歴史と映画が交叉し、改めて篠田映画を見たくなった。

1968 上・下

小熊英二著 (新曜社・各7140円)

江戸演劇史 上・下

渡辺保著 (講談社・各2940円)

河原者ノススメ——死穢と修羅の記憶

篠田正浩著 (幻戯書房・3780円)